

クルマの魅力は、走りとデザイン。世界を魅了するシビックに際立たせる

「シビックをCセグメント世界トップにする」

開発に取り組む原動力となった、私たちのモチベーションです。

この強い志を当初から一貫して持ち続けられたのは、2つの想いがあったからでした。

1つは、シビックは保守的なクルマになってしまったのでは、という声が聞こえてきたことです。

いつの時代でもシビックはチャレンジを続けていますが、歴史を重ねていくなかで成熟した大人へと進化したからかもしれません。そこで今回は、これまで培ってきた質の高さをさらに引き上げながら、クルマとしての存在感をいっそう際立たせたいと考えました。

もう1つは、高速走行での安心感を格段に高めたいという私の想いです。

これからの時代のCセグメントには、欧州の使われ方のような、ワインディングはもちろん時速200キロ以上での高速道路でも安定した走りが求められると強く感じたからです。

世界中のお客様に喜んでいただける高次元の走りと個性的でスポーティーなデザインを実現する。

そのためには、通常のモデルチェンジのような進化ではなく、

シビックというクルマをゼロから見つめ直し、改めて創り上げる必要がありました。

クルマの基本骨格であるプラットフォームを新たに開発し、新世代のエンジンを採用。

世界で最も厳しい道路条件が揃ったドイツのニュルブルクリンクやアウトバーンでセッティングを重ねるなど、あらゆるシーンで安心して運転を楽しんでいただける走行性能を実現しました。

また、デザインについては走りの美しさとは何かを突き詰め、

技術や性能に裏付けられた機能美を追求し、車体骨格から刷新。

走りを感じさせるロー&ワイドのスタイリングによって運動性能や空力性能を高めながら、広く快適な室内も実現しています。

歴代シビックが大切にしてきたクルマづくりの思想とチャレンジングスピリットを踏襲し、

なおかつ大胆な変革によって10代目シビックの新しい価値創造へと結実させました。

開発責任者 松本英樹

松本英樹 (まつもと ひでき)

(株)本田技術研究所 四輪R&Dセンター 主任研究員

1990年、(株)本田技術研究所入社。シャシー開発部門に配属後、設計領域を担当。

2005年の8代目シビックをはじめ欧州アコードなどのシャシー設計PLを歴任。

RDX(アキュラSUVモデル)の車体設計責任者を経て、

今回、10代目シビック(セダン、ハッチバック)のLPL(開発責任者)に就任。

シビックの開発にはこれまで12年携わっている。

趣味はドライブ、映画鑑賞。

愛車は8代目シビック(ハイブリッド)。シャシー設計PLを務めた想い入れの深いクルマ。

